

コラム8

大学でメディアリテラシーを教えること、学ぶこと

この本は、おもに大学で、あるいは大学生以上の人がメディアリテラシーを積極的に学ぶことをめざして書かれたテキストです。では、大学でメディアリテラシーを教えること／学ぶことについて、みなさんはどう考えますか。

いきなりそんなことを聞かれても困る、と思うかもしれませんが、こう言うのにはわけがあります。というのも、メディアリテラシーを教える手法は「子ども」をおもな対象として体系化されてきたからです。ここでいう子どもとは、小中校生をさす場合が多いのですが、アメリカやオーストラリアでは「K-12」という括り方で、4歳児の幼稚園生（kindergarten）から19歳の高校生までをその対象者として考えます。そして、小規模の教室で子どもたちが手をつかって作業し、そこから生まれる疑問や気づきを繰り返すことでメディアリテラシーを涵養していくのです。つまり、メディアリテラシーは、学校教育のなかで、国語や美術などと同じように教えられるべきものだとするのが現在の世界的な潮流です。もちろん、イギリスのオープンユニバーシティやアメリカのパブリック・アクセスのように、メディアリテラシーを成人教育として積極的に展開する活動がないわけではありませんが、相対的には小さな動きです。

一方、日本では、一部の学校の先生たちの積極的な活動があるものの、メディアリテラシーを涵養するプログラムは義務教育のカリキュラムにほとんど入っていません。その代わり、メディアリテラシーの名を冠した授業が、2000年以降多くの大学で導入されました。しかもその多くは、一般教養科目などの講義科目として置かれています。

こうした違いにはどのような背景があるのでしょうか。はっきりとはわかりませんが、日本では、義務教育として浸透しないことでかえってその周辺に活

動が広がったのではないかと考えられます。市民活動家として日本にメディアリテラシーを紹介した鈴木みどりや、そうした活動を社会のさまざまな構成員と協働しながら展開した水越伸らをはじめとする大学関係者の牽引も大きいでしょう。メディアリテラシー活動は小中高の教室の外で——具体的には大学の講義や市民講座やケーブルテレビ局などで——おこなわれています。

「子ども」ではなく「大人」を対象にしたとき、欧米圏で確立されている子ども用・K-12用のプログラムとまったく同じ方法で、というわけにはいきません。大人は子どもに比べて手をつかうことが苦手です。ものごとをすぐに「頭で」考えようとします。ですから、メディアリテラシーのプログラムも、頭で考えることと手をつかうことのバランスの良さが求められます。本書は、大学の座学で学びながらも、同時にある程度手を動かすことで、両者を有機的に結びつけることを意識して書かれています。

また、2000年以降大学での授業が増えたもうひとつの理由として、ネット社会がこれまで想定もしなかったような個人とメディアの関係を生み出したということがあります。そうした状況では、もはやメディアリテラシーを備えていることは、社会で生きていくことと同義なのです。そして、メディアリテラシーという営みが、日々ものを考えることや、人と接することそのものであることに気づくことができるのは、社会や自身のことをより俯瞰して捉えられる大人ならではのです。デビッド・バックinghamの言葉によれば、メディアリテラシーは「分析、評価、批判的な〈振り返り〉reflectionを要件とする」（バックingham 2003=2006:53）作業ですから、これをむしろ大学生以上になってやることは、非常に高度な振り返りを可能にするということだと思います。

[村田麻里子]